

二〇一八年度大学入試センター試験解説〈古典〉

第3問 古文 本居宣長『石上私淑言』

〔出典〕

『石上私淑言』は、江戸時代中期の国学者である本居宣長（一七三〇～一八〇一）によって書かれた歌論書である。問答形式で、和歌の本体論・表現論・歴史などを論じたもので、これに先立って著された歌論書『排蘆小船』をふまえ、和歌の本質を「もののははれ」にあるとする論を展開した著作である。「もののははれ」とは、折に触れ見たり聞いたりする物事に触発されて生ずるしみじみとした情趣や哀愁のことであり、宣長は、これを日本人特有の美的理念だと考えたのである。

宣長は、『万葉代匠記』の著者契沖の歌学に触れて古典研究を志し、『万葉考』・『歌意考』等の著者賀茂真淵を師として国学を学んだ。著作は、古典注釈書『古事記伝』、『源氏物語玉の小櫛』、『随筆集』『玉勝間』など多数にわたり、自宅の鈴屋で門人を集め講義をしたことから鈴屋大人とも呼ばれた。

〔通釈〕

（ある人が）尋ねて言うには、恋の歌が非常に多いのはどうしてか。

（私が）答えて言うには、まず『古事記』や『日本書紀』に散見するたいそう古い時代の歌の数々をはじめとして、歴代の多くの歌集にも、恋の歌ばかりが格別に多い（その）中でも、『万葉集』では相聞と（いう部立の中に）あるのが恋の歌であって、すべての歌を雑歌、相聞、挽歌と三つに分け、第八卷、第十卷などには四季の雑歌、四季の相聞と分けている。このように（相聞という部立を設けながら、恋の歌以外の）他の歌をすべて雑歌としていることで、和歌は恋（の歌）を第一のものとするべきである。そもそもどうしてこのようである。「恋の歌が多い」のかと言うと、恋はすべての情趣にまさって深く人の心にしみて、（ことばに出すことを）たいそう抑えがたいことであるためである。だから、（人はそれを歌に託すのであり、）特別にしみじみとするものは常に恋の歌に多いのである。

（ある人が）一般に世間の人が皆常に深く願ひ（心の奥深く）包み隠していることは、恋愛を思うよりも、我が身の栄えを願ひ財宝を求める心などこそが、ひたむきに抑えがたく見えるようであるのに、どうしてそのようなこと「わが身の繁栄や財について」は歌には詠まないのか。

（私が）答えて言うには、「情」と「欲」とには区別がある。まず、すべての人の心に様々に思う思いは、すべて「情」「感情」である。その思いの中

でも、ああでありたいこうでありたいと願う思いは「欲」というものである。それゆえ、この二つは互いに離れないものであって、概して（広義に）言え「欲」も「情」の中の一種ではあるけれども、また特に区別して（狭義に）言えば、人をいとしいと思ひ、かわいと思ひ、あるいは切ないともつらいとも思うような類（の感情）を「情」と言うのであるよ。しかし（実際には）その「情」から出た思いが（変化して）「欲」にも及び、また「欲」から出た思いが（変化して）「情」にも及んで、（人の思いは）一様でなく様々であるのだが、どのようであっても（とにかく）、歌は「情」のほうから生まれて来るものなのである。これは、「情」のほうの思いは物にも感じやすく、しみじみとすることがこの上なく深いためである。「欲」のほうの思いはひたすらに願ひ求める心ばかりであつて、それほど身にしみるほどには繊細でないからであろうか、ちよつとした花の色や鳥の声にも涙がこぼれる（「情」の思い）ほどには奥深くはない。（質問にある）あの財宝をむさぼるような思いは、この「欲」というものであつて、物事にふれて起こるしみじみとした情趣とはほど遠いがために（「欲」という感情からは）歌は生まれて来ないのであろう。恋愛を思うのも、もともとは（何かを求めようとする）「欲」から生ずるものであるけれども、特に「情」のほうに深く関わる思いであつて、生きとし生けるすべての生き物が逃れようがないところの感情である。まして人間は特に物事のしみじみとした情趣を理解するものであるので、格別に深く心にしみて、そのしみじみとした情趣に感動を抑えきれないのはこの（恋愛の）思いなのである。その他にも何かにつけてしみじみとした情趣があることには、歌は生まれ出て来るものであると知るべきである。

そうではあるけれども、「情」のほうは、前にも言ったように、情にもろいことを恥じる後世の習慣のために包み隠し（表に出さぬように）堪え忍ぶことが多いために、かえつて「欲」よりも浅い感情のようにも見えるのであるようだ。しかし、この和歌だけは古代の風情を失わず、人の心の真の姿をありのままに詠んで、弱々しく情にもろい面も全く恥じることがないので、後世になつて奥ゆかしく優雅に（歌を）詠もうとする時には、ますます物事のしみじみとした点を主として、例の「欲」という感情はひたすら嫌つてしまつて、歌に詠むものとも思つていないのである。

ごくまれに（「欲」を詠んだ歌の例が）あるとしても、あの『万葉集』の第三巻にある「酒を讃めたる歌（酒を讃えた歌）」の類であるよ、漢詩では常にあることであつて、このような類の詩ばかりが多いけれど、和歌ではたいそういとわしく憎くまでも思われて、全く心ひかれぬ。何の見る価値もないよ。これは、「欲」は汚れた感情であつて、しみじみとした情感ではないためである。それなのに外国「中国」では、しみじみとした（恋愛に関する）「情」を恥じて隠し、汚れた「欲」をたいそう立派なもののように詠み合つているのはどういふことなのか（理解できない）。

〔解説〕

問1 解釈の問題

短い傍線部ではあるが、品詞分解し、重要単語・重要文法を確認し、前書きなどや前後の文意もふまえて解答したい。

(ア) 標準

「あながちにわりなく」の解釈として最も適当なものを選べ。

「あながちに／わりなく」と単語分けされる。「あながちに」は、程度がはなはだしいことを示して「無理やりだ・一方的だ」「あまりにひどい」「ひたむきだ・いちずだ」「異常だ・度をこしている」などと訳したり、打消表現と呼応して「必ずしも・めったに・決して(〜ない)」と訳したりする形容動詞「あながちなり(強ちなり)」の連用形で、これが正しいのは、①、あるいは⑤である。「わりなく」は、形容詞「わりなし」の連用形。「わりなし」は、本来、「ことわり」(物事の道理)がないことを表す「ことわりなし」が縮まった語で、「道理に合わない・めちゃくちゃだ」「堪えがたい・つらい」「しかたがない・どうにもならない」「ひととおりでない」などと訳す。これが正しいのは、①・②・③である。

よって、正解は①である。

「あながちに」も「わりなく」も、やや広い範囲の意味を示す語であるので迷うかも知れないが、文意から見れば、傍線部は「おおかたの世間の人

は、色(恋愛)を思うよりも、身の栄えや財宝を求め願う気持ちのほうが」から続く箇所であるから、①の訳が最もスムーズに当てはまる。

(イ) 基礎

「いかにもあれ」の解釈として最も適当なものを選べ。

「いかにも／も／あれ」が一語化した慣用的表現。「いかに」は、「どう・どのように・どれほど・どうして」などと訳す副詞。「も」は係助詞。「あれ」は、ラ変動詞「あり」の命令形である。「どうであれ」といった訳になるが、これは、現代でも「事情がどうであれ、結果から見ると……」などと言う表現と同じである。「いずれにせよ」とか、「どのようであっても」のように訳されるが、この「あれ」のような命令形は「放任」の感覚を表し、「どのようであっても(かまわない)」の意である。

よって、正解は③である。

(ウ) 基礎

「さらになつかしからず」の解釈として最も適当なものを選べ。

「さらに」は、打消表現（ここでは打消の助動詞「ず」と呼応して「全く・決して・少しも（くない）」と、強い否定の意を示す陳述（呼応）の副詞。これが正しいのは⑤であるが、②の「どうにも」も微妙である。「なつかしから」は、「心ひかれる・慕わしい・親しみが感じられる」の意の形容詞「なつかし」の未然形。これは③と⑤が正しいが、他の選択肢の訳も許容範囲ではあると言える。ただ、現代語のように「（過去のことが）なつかしい」という意味であれば、古文の問題として問われないであろう。実際、ここでも「酒」を歌に詠むことについて言っているのであるから、②の「思い出せ」では意味が通じない。

よって、正解は⑤である。

正解 (ア) 21 ① (イ) 22 ③ (ウ) 23 ⑤

問2 文法（傍線部の文法的説明）の問題 基礎

「身にしむばかり細やかにはあらねばにや」についての文法的な説明として適当でないものを選べ。

波線部は「身／に／しむ／ばかり／細やかに／は／あら／ね／ば／に／や」と単語分けされる。

「身」は名詞。

「に」は体言に接続しており、そのまま「に」と訳せるので、「山に登る」の「に」と同じ、格助詞である。よって、選択肢⑤は正しい。このあとにも二カ所「に」があるが、いずれも格助詞ではなく、「一度」も間違いない。

「しむ」は、「深く感じる。しみる」意のマ行四段動詞の終止形。

「ばかり」は、「〜ほど・〜ぐらい」のように程度を表す副助詞。おおよその範囲・程度を表す場合は終止形につき、限定を表す場合は連体形につくことが多い。

「細やかに」は、形容動詞「細やかなり」の連用形。「〜かに」「〜げに」の形の「に」は、「はるかに」「美しげに」のように、ナリ活用の形容動詞の連用形の語尾である。

「は」は係助詞。

「あら」は、ラ変動詞「あり」の未然形。

「ね」は、直前の「あら」が未然形であり、直後の「ば」が未然形・已然形に接続する接続助詞であるから、打消の助動詞「ず」の已然形である。よって、**選択肢①は正しい**。回数も「一度」で間違いない。

「ば」は、「ね」が打消の助動詞「ず」の已然形だとすると、「と・ので」のように訳す、順接確定条件の用法である。よって、**選択肢③の「仮定条件を表す」は正しくない**ことになる。「ば」が「もしくならば」のように訳す、仮定条件になるのは、未然形に接続した場合である。これが正解になる。

「に」は、係助詞「や」を伴って、「にや」の下に係り結びの語「ある・あらむ」が省略されている状態であり、これを補って「くにやあらむ。(くであろうか)・くにやある。(くであるか)」とすると、「で」と訳せる。よって、「に／や」の「に」は、断定の助動詞「なり」の連用形である。よって、**選択肢②は正しい**。回数についても「一度」で間違いはない。

「や」は係助詞であるが、係助詞「や」は疑問・反語を示すので、**選択肢④も正しい**。

文法問題としては、形式的にはやや変わった形であるが、「文法的説明」の正誤を問うという点では、今までの出題と大きな変化はない。今回は**接続助詞「は」**の用法がポイントであったが、二〇一六年度には**格助詞「の」**の用法が出ており、助詞の用法には今後も注意したい。

正解 24 ③

問3 内容(筆者の主張) 説明の問題 標準

傍線部A「恋の歌の世に多きはいかに」とあるが、この問いに対して、本文ではどのように答えているか。最も適当なものを選べ。

本文は問答形式の歌論である。ある人物の言葉として「問ひて云はく」で質問が示され、それに対する筆者本居宣長の答えが「答へて云はく」以下に示されるという形式になっている。

傍線部Aは一つめの質問で、「恋の歌が非常に多いのはどうしてか」という質問である。この質問に対する「本文」での「答え」は、当然、直後の「答へて云はく」以下、『古事記』『日本紀』にく恋の歌に多かることなり(通釈参照)に示されているはずである。

ここで宣長は、まず、上代(古代)の『古事記』や『日本書紀』の歌から歴代の多くの和歌集に至るまで恋の歌が多く、『万葉集』ではことさらに

「相聞（＝恋の歌）」という分類を設けていることを述べ、質問にあるとおり、恋の歌が多いことを認めている。そして、それに続くのが、「そもいかなればかくあるぞといふに、恋はよろづのあはれにすぐれて深く人の心にしみて、いみじく堪へがたきわざなるゆゑなり。されば、すぐれてあはれるすぢは常に恋の歌に多かることなり」という説明であるが、これは、「そもそもどうしてこのようである」「＝恋の歌が多い」のかと言うと、恋はすべての情趣の中で特に深く人の心にしみて、（表に出すことを）たいそう抑えがたいことであるためである。だから、（人はそれを歌に表し、）特別にしみじみとするものは常に恋の歌に多いのである」という意味である。これが「恋の歌が非常に多いのはどうしてか」の答えであるから、このことを誤りなく説明している②が正解である。

①は、『万葉集』の恋の歌の多さがそれ以降の歌集へ影響したとは書かれていないので誤り。『万葉集』の例は、古代から恋の歌が「相聞」として格別に扱われていたことを述べるために書かれているのである。

③の「相手への思いをそのまま言葉にしても、気持ちは伝わりにくい」は本文になく、それゆえに「恋心は歌に託して」詠まれてきたとも本文には書かれていない。

④は、四季の歌の中にも恋の歌があることを言っており、それは本文にも書かれていることであるが、これは、相聞プラス四季の中にも、というように恋の歌が多いことの説明にはなっているが、ここでの「恋の歌が非常に多いのはどうしてか」の答えにはなっていない。

⑤の「自分の歌が粗雑であると評価されることを避ける」は本文になく、それゆえに「優雅な題材である恋を詠む」ことが「多く行われてきた」とも本文には書かれていない。

正解 25 ②

問4 内容（筆者の主張） 説明の問題 標準

傍線部B「情と欲とのわかまへ」と恋との関係について、本文ではどのように述べているか。最も適当なものを選べ。

傍線部は「情と欲との区別」という意味であるが、これについては、傍線部に続けて説明が加えられている。

まず、宣長は、「すべての人の心にさまざま思ふ思ひは、みな情なり（＝すべての人の心に様々に思う思ひは、どれも情である）」と言ひ、その「情」の中で、「とあらまほしかくあらまほしと求むる思ひ（＝ああでありたいと望む思ひ）」が「欲」であり、「なべては欲も情の中の一様なれ（＝概して言えば欲も情の中の一様ではある）」と言っている。この場合、「情」とは、あらゆる思いを含む、広義の意味での「感情全体」

を言っているのである。

ところが、宣長は続けて、「またとりわきては、人をあはれと思ひ、かなしと思ひ、あるはうしともつらしとも思ふやうの類をなむ情とはいひける（＝また特に区別して言うならば、人をいとしいと思ひ、かわいいと思ひ、あるいは切ないともつらいとも思うような類の感情を情と言うのである）」と述べている。こちらの「情」は、感情全体を言っているのではなく、**狭義な意味として、さまざまな感情のうち、「恋愛や情趣に感じる情」**を言っているのである。

広義の意味の「情」（＝感情全体）の中には、「欲」も、**狭義の意味の「情」**（＝恋愛や情趣に感じる情）も含まれることになる。

ここまでのことだけでも、「情」と「欲」についての説明は、③の「人の心に生まれるすべての思い（＝『欲』も含む）は『情』（＝広義の『情』）であるが、特に、誰かをいとしく思ったり鳥の鳴き声に涙したりするなど、身にしみる細やかな思い（＝狭義の『情』）を指す。」という説明が正しいことが判断できる。また、③は、「鳥の鳴き声に涙したりするなど」が、波線部の直後の、「はかなき花鳥の色音にも涙のこぼるるばかりは深からず」に、「我が身の繁栄や財宝を望むなど、何かを願ひ求める思いは『欲』にあたる」が、その後の、「かの財宝をむさぼるやうの思ひは、この欲といふものにて」に、「恋は『欲』と『情』の双方に関わる」以降が、さらにその後の、「色を思ふも本は欲より出づれども、ことに情の方に深くかかる思ひにて」に、それぞれ相当して説明に誤りがない。

よって、正解は③である。

要は、波線部Bの直後から、その段落にあることと内容合致問題である。

①は、ほぼ全面的に間違っている。「悲しい、つらいといった、自分自身についての思いを生じさせるものが『情』で、「哀れだ、いとしいといった、恋の相手についての思いを生じさせるものが『欲』」ということは本文にないし、「恋において『情』と『欲』は対照的な関係にある」わけでもない。

②は、途中にもキズがあるが、末尾の、「恋は『情』からはじまり、やがて『欲』へと変化する」が大きく間違っている。

④は、「もともと恋は誰かと一緒にいたいという『欲』に分類される感情」、「恋を成就させるには『欲』だけではなく様々な感情が必要なので、『情』にも通じるべき」が間違い。

⑤は、「情」を「自然を賛美する心とつながるもの」、「欲」を「人間の作った価値観に重きを置く」ものと対比させている点からして間違いである。

正解 ③

26

問5 内容(筆者の主張) 説明の問題 標準

「情」と「欲」の、時代による違いと歌との関係について、本文ではどのように述べているか。最も適当なものを選べ。(傍線部なし)

この設問には傍線部がないが、「情」と「欲」については問4でも問われており、問4では選択肢の内容が30ページの最後あたりにまで及んでいる。つまり、この設問で見るべき点は、それと重なることなく、さらにその後ろあたりにありそうである。また、この設問では「時代による違い」が問われているのであるから、31ページ三行目からの「さはあれども」から始まる段落に「後の世」(後世)や「上つ代」(古代)という「時代」を表す語が出てきていることに注目したい。

そこで、「さはあれども」から始まる段落を見ると、「情の方は前にいへるやうに、心弱きを恥づる後の世のならばしにつつみ忍ぶこと多きゆゑに、かへりて欲より浅くも見ゆるなめり。(「情のほうは、前にも言ったように、情にもろいことを恥じる後世の習慣のために包み隠し、表に出さぬように堪え忍ぶことが多いために、かえて欲よりも浅い感情のようでもあるのであるようだ)」とあり、続けて、「この歌のみは上つ代の心ばへを失はず。人の心のまことのさまをありのままに詠みて、めめしう心弱き方をもさらに恥づることなけれ(「この和歌だけは古代の風情を失わず、人の心の真の姿をありのままに詠んで、弱々しく情にもろい面も全く恥じることがない)」とあって、これらはそのまま選択肢④の内容に相当する。

よって、正解は④である。

歌は「情」(狭義の意味の「情」)から生まれるのであるから、恋の歌が「欲」にも支えられてきたとする①、もともと歌は「欲」にもとづいてきたとする⑤は誤り。また、「情」は弱いものと思われがちだが、歌の中ではずっと息づいているのであるから、「欲」と比べて弱々しい感情であるから「情」は時代が経つにつれて消えていったとする②(宣長は弱々しく見えるとは言っているが、弱々しい感情だとは断定していない)や、後世、恋の歌も「情」も衰退し、「欲」が肥大したとする③も正しくない。

正解 27 ④

問6 内容(筆者の主張) 説明の問題 応用

歌や詩は「物のあはれ」とどのように関わっているのか。本文での説明として最も適当なものを選べ。(傍線部なし)

この設問にも傍線部がないが、設問文にある「詩」という言葉が出てくるのは、最終段落である。

そこで、最終段落を見ると「人の国」(外国・ここでは中国のこと)の「詩」(注5「漢詩」)では、「あはれなる情をば恥ぢ隠して、きたなき欲をし

もいみじきものにいひ合へる（＝しみじみとした情を恥じて隠し、汚れた欲をたいそう立派なもののように詠み合っている）」と述べられている。ここが、「詩」と「物のあはれ」の関わりを説明している箇所である。

「歌」と「物のあはれ」の関わりについては、最終段落には書かれていないので、「歌」・「物のあはれ」という言葉を手がかりにしながら、本文をさかのぼって、説明となっていそうな箇所を探すと、本文十六行目に、「色を思ふも本は欲より出づれども、ことに情の方に深くかかる思ひにて、生きとし生けるものまぬかれぬところなり。まして人はすぐれて物のあはれを知るものにしあれば、ことに深く心に染みて、あはれに堪へぬはこの思ひなり。その他もとにかくにつけて物のあはれなることには、歌は出で来るものと知るべし（＝恋愛を思うのも、もともとは欲から生ずるものであるけれども、特に情のほうに深く関わる思いであって、生きとし生けるものが逃れようがないところの感情である。まして人間は特に物事のしみじみとした情趣を理解するものであるので、格別に深く心にしみて、そのしみじみとした情趣に感動を抑えきれないのはこの思いなのである。その他にも何かにつけてしみじみとした情趣があることには、歌は生まれ出て来るものであると知るべきである）」とある。また、この部分の末尾は、十三行目の「歌は情の方より出で来るものなり（＝歌は情のほうから生まれて来るものなのである）」も同じである。本文全体の趣旨とも言え、宣長の「もののあはれ」論そのものであるとも言えるが、要は、「歌は『もののあはれ』から生まれる」と言っているのである。

「詩」と「物のあはれ」の関わりについても、「歌」と「物のあはれ」の関わりについても、右で見た内容に相当する説明をしているのは選択肢④であるから、正解は④である。

①の「何を『欲』の対象とするかは国によって異なる」、②の「詩の影響を受けるあまり、『欲』を断ち切れずに歌を詠むこともあった」、③の「一途に願ひ求める気持ちを表すときは、歌に代わって詩が詠まれるようになった」、⑤の「詩も『物のあはれ』を知ることから詠まれる」は、いずれも本文にない内容、または、本文と食い違う内容であり、誤りである。

正解
28
④

第4問 漢文

李燾『続資治通鑑長編』

【書き下し文】

嘉祐は、禹偁の子なり。嘉祐は平時は愚駭のごときも、独り寇準のみ之を知る。準開封府を知りしとき、一日、嘉祐に問ひて曰はく、「外間準を議すること云何」と。嘉祐曰はく、「外人皆丈人且夕入りて相たらんと云ふ」と。準曰はく、「吾子に於いては意ふこと何如」と。嘉祐曰はく、「愚を以て之を観るに、丈人未だ相と為らざるに若かず。相と為れば則ち誉望損なはれん」と。準曰はく、「何の故ぞ」と。嘉祐曰はく、「古より賢相の能く功業を建て生民を沢する所以は、其の君臣相ひ得ること皆魚の水有るがごとければなり。故に言聴かれ計従はれ、而して功名俱に美なり。今丈人天下の重望を負ひ、相たれば則ち中外太平を以て責めん。丈人の明主に于けるや、能く魚の水有るがごときか。嘉祐の誉望の損なはれんことを恐るる所以なり」と。準喜び、起ちて其の手を執りて曰はく、「元之は文章は天下に冠たりと雖も、深識遠慮に至りては、殆ど吾子に勝る能はざるなり」と。

【通釈】

王嘉祐は、(北宋の著名な文人である) 王禹偁の子である。嘉祐はふだんは愚かなようであったが、ひとり寇準だけは彼が決して愚かな人物ではないことを知っていた。寇準が開封府の知事を務めていた頃、ある日、嘉祐に尋ねて言った、「世間では私のことをどう論評しているか」と。嘉祐は言った、「世間の人たちは皆、あなたは間もなく朝廷に入って役職に就き、宰相になるだろうと言っています」と。寇準は言った、「あなたとしてはどう思うか」と。嘉祐は言った、「私が思いますには、あなたはまだ宰相とならないほうがよろしいでしょう。もし、あなたが宰相となれば、あなたの名声は損なわれるでしょう」と。寇準は言った、「(それは) どうしてか」と。嘉祐は(答えて) 言った、「昔から、賢相が功績を打ち立て人民に恩恵を施す(ような施策を行う) ことができるわけは、君主と(宰相たる) 臣下とが(深く) 理解し合うことが、皆、魚にとって水があるような、極めて良好な関係になっているからです。それゆえ、宰相の進言は君主に聞き入れられ、宰相の立てる計画も君主に受け入れられて、功績と名誉がともに賛美されるものとなるのです。今、あなたは天下の人々の大きな期待を背負い、宰相となれば国中の人々が(あなたの力による) 太平を望むでしょう。(しかし、今) あなたは君主にとって、魚にとって水が必要であるような存在であり得ているでしょうか。(これが) 私があなたの名声が損なわれるであろうことを危惧する理由でございます」(それを聞いて) 寇準は喜び、立ち上がって嘉祐の手をとって言った、「(あなたの父の) 元之は文章においては天下第一ではあるが、見識や思慮の深遠さに至っては、おそらくあなたにはかなわないであろう」と。

〔解説〕

問1 語の意味の判断の組合せ問題 基礎

二重傍線部X「議」、Y「沢」の意味の組合せとして最も適当なものを、一つ選べ。

二カ所の二重傍線部の語（漢字）の意味の判断の問題であるが、かつての傾向であれば、それぞれの字を含む熟語が並べられた選択肢から答を選ぶ形が多かった。今回は辞書的な意味が並んでいる中から答をさぐるという形である。

X「議」、Y「沢」ともに送り仮名がない分、やや面倒に見えるが、いずれもサ変動詞「議す」「沢す」で、文中ではXは「議すること」、Yは「沢する」と読む。

X「議」の字義としては、①「相談する」、②「非難する」、③「論評する」、⑤「批判する」はOKである。ここでは、寇準が嘉祐に、「外間準を議することを云何（＝世間では私のことをどのように「議」しているか）」と尋ねた文中にあり、この問いに対して、嘉祐が、「外人皆文人旦夕入りて相たらんと云ふ（＝世間の人々は皆、あなたは間もなく朝廷に入って役職に就き、宰相になるだろうと言っています）」と答えていることから、世間が①「相談」しているかを尋ねているのではなく、②「非難」・⑤「批判」のようにマイナス評価をしているかを尋ねているのでもないことがわかる。文脈だけなら、④の「礼賛する」はあてはまりそうであるが、「議」の字義としてそぐわない。よって、正解は③「論評する」である。

Y「沢」の③は「恩恵を施す」である。「沢す」は、動詞としては「うるおす」で、「ぬらす。しめらせる」「めぐむ。恩恵をほどこす」意がある。「沢雨（＝万物をうるおすよい雨）」「恩沢（＝めぐみ。いつくしみ）」などの「沢」がこの意味である。「賢相」が「功業を建て生民を沢する」という文脈からも、③の「恩恵を施す」に矛盾はない。①「水を用意する」、②「田畑を与える」、④「物資を供給する」のような具体的な意味はないし、⑤「愛情を注ぐ」は意味的には近いが、為政者として人民に…という上から感に欠ける。

正解 29 ③

問2 短い傍線部の語句の解釈の問題 I 基礎 II 基礎

波線部Ⅰ「知之」・Ⅱ「開封府」の解釈として最も適当なものを、それぞれ一つずつ選べ。

短いとはいえ、この問いも、波線部の送り仮名が省かれている。

Ⅰ「知之」は「之を知る」である。「知る」については、すべての選択肢が「知っていた」と共通しているから、問題は「之」という指示語の内容である。

「嘉祐は平時は愚駭のごときも、独り寇準のみ之を知る（＝嘉祐はふだんは愚かなようであったが、ひとり寇準だけは「之」を知っていた）」という、逆接の接続助詞でつながる文脈であるから、「之」の内容は「愚かでないこと」でなくてはならない。とすると、「愚かであること」になっている③・④は消去できる。また、ここは、「愚か」か「愚かでない」かがポイントなのであるから、(注2)に父の王禹偁が「著名な文人」であることには触れてはあるが、⑤の「文才」云々も、ここでは関係ない。あとは①か②であるが、ことあとの本文の内容から判断して、②の「乱世には非凡な才能を見せる」は妥当ではない。Ⅰの正解は①である。

Ⅱ「開封府」の「知」は、古文でも重要単語である、「治める」意味の「知る(領る・治る)」で、「開封府を知りしとき」あるいは「知りしとき」と読む。あるいは、「知」を「知事。州・県などの長官」の意の名詞「知」ととって、「開封府に知りしとき」と読むこともできる。Ⅱの正解は③である。

正解 ③0 ① ③1 ③

問3 傍線部の書き下し文と解釈の組合せ問題 (i) 標準 (ii) 標準

傍線部A「丈人不若未為相。為相則誉望損矣」について、(i)書き下し文・(ii)その解釈として最も適当なものを、それぞれ一つずつ選べ。

近年、「返り点の付け方」と「書き下し文」の組合せ問題が頻出していたが、「書き下し文」と「解釈」(今回はそれぞれの正答を選ぶ形ではあるが)の組合せ問題も、過去に出題例は多い。

傍線部は二つの文に分かれるが、まず、前半にある、「不若」に着目しなくてはならない。これは「A不若B(AハBニシカズ)」で、「AはBには及ばない」「AよりもBのほうがよい」と訳す比較の公式である。「若」は「如」も用いられ、「百聞不若一見」(百聞は一見に如かず)という

例文でよく知っているであろう。もともと、この傍線部の場合、Aにあたるのは直前にある「丈人」ではなく、「外人（＝世間の人々）」が言っていた、寇準が「入りて相たらん」、つまり、「朝廷に入って役職に就き、宰相になる」ことである。よって、公式どおりAに相当する表現を補えば、前半の文は次のようになる。

丈人 為^レ相^ハ不^レ若^レ未^レ為^レ相。

いずれにせよ、「丈人^ノに若かず」と読まれなければならないので、(i)の書き下し文については、②か④になり、「相」に「なる」ほうがいいのか、「ならない」ほうがいいのかという比較であるから、②のように「相の^{ため}にせざる」と読んだのでは意味が通じない。④の「相と為らざる」の読み方のほうが正しい。

後半の文の読み方には、①・③・④の「相と為れば則ち誉望損なはれんと」と、②・⑤の「相の^{ため}にすれば則ち誉望損なはれんと」の、3対2の配分があるが、これも「相の^{ため}にすれば」では意味が通じない。よって、(i)の正解は④である。

(i)の書き下し文の正解が④とわかれば、その読み方どおりの訳し方になっているのは、③しかない。(ii)の正解は③。

なお、(ii)の選択肢は、①が(i)の⑤、②が(i)の②、④が(i)の③、⑤が(i)の①に合わせてある。「～ほうがよろしいでしょう」という比較の訳し方になっているのは②と③であるが、②は「補佐」が間違っている。

正解 ③② ④ ③③ ③

問4 傍線部中の語の主体の判断の問題 標準

傍線部B「言聴計従」とあるが、(i)誰の「言」「計」が、(ii)誰によって「聴かれ」「従はれ」るのか。(i)と(ii)との組合せとして最も適当なものを、一つ選べ。

直前部に、「其の君臣相ひ得ること皆魚の水有るがごとければなり（＝君主と臣下とが理解し合うことが、皆、魚にとって水が必要であるような、極めて良好な関係になっているからです）」とあり、この場合の「臣」はもう少し前にある「賢相（＝賢明な宰相）」のことである。（注13）にあるように、ここは、「君臣の関係」について述べている部分である。

よって、(i)の「誰の」「言」「計」が、(ii)の「誰によって」「聴かれ」「従はれ」るのかは、(i)・(ii)のどちらが「君」で、どちらが「臣」という問題になる。

とすると、①の「(i)丈人、(ii)相」ではどちらも「臣」であり、②・⑤のように「生民(注12「人々」)」が入っているのは間違いになるので、選択肢は③か④に絞られる。

ところで、「魚の水有るがごとし」は、『三国志』の時代の蜀の劉備(君主)が諸葛孔明(賢相)のことを、「狐の孔明有るは、猶ほ魚の水有るがごとし(＝私にとって諸葛孔明がいてくれるのは、あたかも魚にとって水があるようなものだ)」と言ったという有名な話にもとづいている。ここから「水魚の交り」という語が生まれ、本来的には親密な君臣関係のことであるが、一般に、「刎頸の交り」や「管鮑の交り」などと同じく、友情の親密さに用いられる。この劉備の言によれば、君主である劉備が「魚」で、臣下の賢相である諸葛孔明が「水」ということになる。「魚」は「水」がなければ生きられないのだから、劉備はそれだけ諸葛孔明のことを大切にし、自分をへり下らせていることになる。

そうしたこともふまえれば、この傍線部は、「臣下」の「言」「計」が、「君」によって「聴かれ」「従われ」ととることになる。「君臣の関係が極めて良好」であれば、「臣」の「言」も「君」に「聴」き入れられ、「臣」の進言する「計」についても「君」に「従」われるのである。

(i)が「臣」、(ii)が「君」の側にならなければならぬので、正解は③である。

正解 34 ③

問5 傍線部の理由説明の問題 応用

傍線部C「嘉祐所以恐譽望之損也」とあるが、王嘉祐がそのように述べるのはなぜか。その理由として最も適当なものを一つ選べ。

傍線部そのものは、「(これが)私があなたの名声が損なわれるであろうことを危惧する理由でございます」という意味である。選択肢前半に、2対2対1の配分があることに着眼する。

- ①・⑤は、「宰相は……」
 ②・④は、「人々は……」
 ③だけが、「皇帝は……」

である。「寇準に対して天下を太平にしてほしいと期待する」のは、②・④の「人々」である。これは、傍線部直前部の、「今丈人天下の重望を負ひ、相たれば則ち中外太平を以て責めん(＝今あなたは天下の人々の大きな期待を背負い、宰相となれば国中の人々が(あなたの力による)太平を望むでしょう)」をふまえている。この「天下」「中外」は、「外人皆丈人旦夕入りて相たらんと云ふ(＝世間の人々は皆あなたは間もなく朝廷に入って役職

に就き、宰相になるだろうと言っています」の「外人（＝世間の人々）」でもある。よって、答は②・④のどちらかになる。

選択肢後半については、さきほどの文に続けて、「丈人の明主に于けるや、能く魚の水有るがごときか（＝あなたは君主にとって、魚にとって水が必要であるような存在であり得ているでしょうか）」と述べ、もしそうでなかったら、あなたの「誉望」が「損なはれんことを恐」れる、と嘉祐は言っている。とすると、④の「もし寇準が皇帝の意向に従ってしまえば」ではなく、②の「もし寇準が皇帝と親密な状態に（＝つまり「魚の水有るがごとき」状態に）なれなければ」のほうが正しい。そのような「良好な関係」になれないと、「言」は「聴かれ」ず、「計」は「従われ」なくなり、「功業を建て」ることも、「生民を沢する」こともできなくなり、「太平は実現され」なくなり、人々の「期待は失われてしまう」ことになるのである。

正解 35 ②

問6 傍線部の内容説明、及び本文全体の主旨の問題 応用

傍線部D「殆不能勝吾子也」とあるが、その説明として最も適当なものを、一つ選べ。

まず、傍線部Dを、直前部の寇準の言葉の冒頭から見ると、「元之は文章は天下に冠たりと雖も、深識遠慮に至りては、殆ど吾子に勝る能はざるなり」、つまり、「(あなたの父の)元之(＝王禹偁)は文章においては天下第一ではあるが、見識や思慮の深さに至っては、おそらくあなたにはかなわないであろう」と言っている。

選択肢後半の、「父の王禹偁」が「王嘉祐」にかなわないのはどのような点であるかの説明としては、④の「見識の高さという点では」が、①の「政治家としての思考の適切さ」(そもそも嘉祐は「政治家」でもない)、②の「意志の強さ」、③の「歴史についての知識の深さ」、⑤の「言動の慎重さ」などよりも妥当である。

選択肢前半部は、本文にあることと内容合致と言ってよい。④の「王嘉祐は皇帝と宰相の政治的関係を深く理解し」は、君臣関係が「魚の水有るがごとき」良好な状態にあってはじめて、宰相の「言・計」が君主に受け入れられ、いい政治が行えるのだと語ったことに相当し、「寇準の今後の進退についての確に進言している」は、嘉祐が寇準に、問3になっている傍線部Aで、「丈人未だ相と為らざるに若かず。相と為れば則ち誉望損なはれん」という進言をしたことに相当していて、間違いがない。

①は、「宰相が……どのように人々と向き合うべきか」が間違い。

②は、「世間の意見の大勢にはつきりと反対している」が間違い。

③は、「古代の宰相の功績を参考にしている」が間違い。
⑤は、「…ものの、…」でつながれている逆接の感覚が微妙であり、後半も含めた全体が間違っている。

正解

36

④